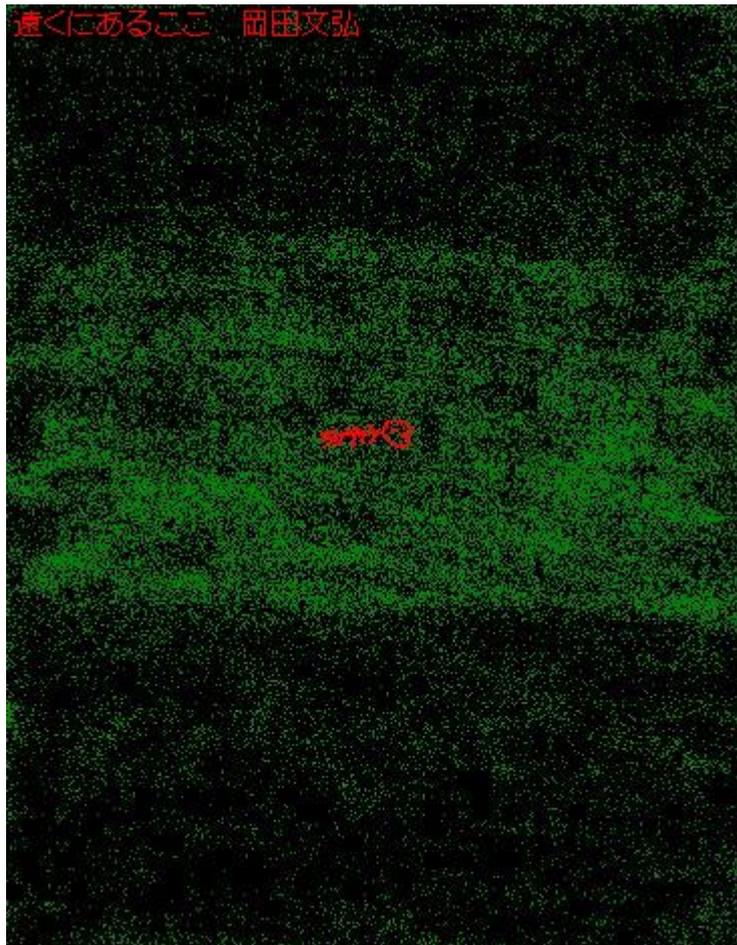


遠くにあるここ（岡田文弘詩集Ⅲ）



第三詩集
挿絵 岡田文弘

第 I 部

換気

居座ったままのクーキが
ぐるぐると天井を
回転しております

その下できみは
数学のなぞなぞを
解かんとしています

AはBに別れを告げ
BとQはカケオチして
そしたらZが二年目に生まれて
やがてZはPと恋に落ちるのでしょう

きみはあきらめて
まどを開けました
さんにたまったほこりがきらきら飛びます

ぐるぐるしていたクーキは
おもての風になりました
というわけで
おいしいマフィンもあることだし
お茶にしましょう

(BとQはカケオチして)
(やがてZはPと恋に落ちるのでしょう)

まだ未練の有るクーキがひとカケラ
花びんのポピーにひっかかっております

ねぎぼうず

ねぎぼうずの間を
走っていました
どうっと吹いた風に
せなかを押されて

虫たちを追いかけていたのです

はたけのどろは
くつ底にこびりついて
時をへるごとに
白くなってゆきます

あぜみちはどこまで
つづいていたのでしょうか

そんな風にして
もう2度と無い
たいせつなひとときが
こぼれてゆくのです

おばかさん

にっこり笑ったら日が暮れました
何にも出来無いまま座っていました
ほんとうに何にも出来無かったの
きみにばかにされてあたり前です

ねぼけまなこの僕はただ笑うだけ
ばかみたいな顔でばかみたいなうたを歌い
ばかみたいに死んでいくのです
それでもべつだん 何でもありません

笑っているぼくはたぶんばかです
きもちの良い空は好きなのです
ただただこうして笑っているのです

午睡をしていたらゆめを見た
きみもいっしょに笑っているゆめです
きつき店のみんなも通りに出て
ぼくといっしょに笑っているゆめです

にっこり笑ったら日が暮れました
何にも出来無いまま座っていました
きみにばかにされてもぼくはいいです
ただただこうしてわらっているのです

笑っているぼくはたぶんばかです
きもちの良い空は好きなのです
ただただこうして笑っているのです

子どもたち

子どもたちとピクニックに行く
道ばたに咲いた花、ふりつもった木の葉
しぶきを上げてはね上がった魚について語る
子どもたちとピクニックに行く
北極星のさがし方を教え、テントを張り
ラヂオを耳に押し当ててみる
子どもたちとピクニックに行く
月のみちかけ、人のはくうそ
背徳と美学の境界を話し合う
子どもたちとピクニックに行く
慈悲の心、神々の有無
耳の中を音楽が吹きぬけてゆく
われわれは谷底で休息をとり
急勾配をよじ登った
寝袋にくるまって、あとは夢を見るだけ
子どもたちとピクニックに行く
大いに愛されるべき子どもたち

まんじゅう

人をころして死刑になったやつが
さいごの朝 まんじゅうを食いたい
と 言いだした
規則で死ぬまえの囚人には
すきなものを食わすことになっていたの
看守は急いでまんじゅうを買ってきた

その5年まえ
道のあるいていたあの人は
両手いっぱいほかほかの肉まんを抱えていた
家で女房とこどもといっしょに食べるため
その人は知らなかった
あの曲がり角で
ナイフにぎった通り魔に体当たりされて
そして
あっけなく死んでしまうことなぞ
ただ雨をさけようと小走りに前へ進んでいて
それから

水たまりの中へ倒れて
ほかほかの肉まんが
食べられなかった肉まんがころがって

人をころして死刑になったやつが
さいごの朝 まんじゅうを食いたい
と 言いだした
規則で死ぬまえの囚人には
すきなものを食わすことになっていたの
やつは望みどおりに
まんじゅうを食らうことが出来て
ペロリとたいらげて
そして
部屋を出て行った

たまご酒（硫黄のかおりいっぱい箱根の頂上にてー）

おかしなほどに静かだったので
カーテンを開けてみると
庭は雪でいっぱいでした

そっと手ですくってみると
この上なく白くて
僕の町にや
汚れた雪はふらないんだと
少し得意になりまして

またぞろフトンへ
もぐりこみました

外はイクラ寒くても
ここはあったかいぞと
少し得意になりまして

またぞろ眠りこけて
しまいました

そしてようよう起きてきた今は
雪解け水の行く末を案じながら
タマゴ酒などを飲んでいきます

待ちぼうけ

こうして待っているうちに
コップいっぱい
空がたまってた
空にはひとすじイタズラガキみたく
ヒコーキ雲が伸びていた

伸びる伸びるヒコーキ雲
はしっこへ洗たくものをブラ下げて
どこからか吹く風にあてていた
そんな風にそんな風にして
僕は今日も

十年前からかりっぱなしの
この本を返しにゆくよ
十年前僕はここできみから
この本を借りたんだよ

コップいっぱいにたまってた空が
弧を描いてくるくる回って
ほこりの立った空気に溶けた
とけいは3時をさしていた
とけいは3時をさしていたんだ

十年前からかりっぱなしの
この本を返しに来たよ
十年間もきみは待ってたんだから
僕を待たせたくもなるよねえ

すし屋のくらし

すし屋のくらしは因果なものさ
おれは流れもののイカなものさ
わさびをぬられてメシの上へ乗せられて
日がな一日ぐるぐる回る

おれのダチ公はショーユをつけられて
幸せそうな親子に食べられた
そんな風にして一人また一人
このカウンターから去っていく

退屈な速度でカウンターは回る
いいかげんおれは飽き飽きした
おれが憧れてたトロ子ちゃんも
さっき食べられちゃったし

けれども段々心細くなる
だれにも取られずにこうして回っていると
おれはどンドン古びてゆく
足の下には「100円」の青い皿

おれはずっと　ぐるぐる　ぐるぐる

ダチ公がカウンターから去ってったように
お客もチラホラ帰りだした
すし屋のくらしは因果なものさ
おれはバイトの兄ちゃんにつまみ上げられ
ごみ箱の中へ捨てられた

帰ろう

うば車の車輪 からから回る
町のはじまで歩いてく
しいたけコトコト おなべの中
風はそよそよ 草をゆらす

落ちたシブガキ 小さくつぶれ
何だか少しさみしいみたい
夕陽ギンギラ 家へ帰ろう
からすもカァカァ 家へ帰ろう

何だか少し さみしいみたい
すな場で出来た服のしみ
おやすみ
また明日遊ぼうね

パン工場へ

野菜がしおれた午前二時
24 時間営業のコンビニの前で
おれの足元にはカップめんの
カップめんのカップが食い散らかした後のカップめんのカップが

原付が横転する音がして
クラクションがいらないた
原付の後部座席に大量のお中元
兄いに持っていく途中だったのだ

制限速度40キロの道路を
ひまなので眠れないのでどこまでも
どこまでも歩いて行ったところ、アレ
突然断絶していてその先には虚空が

このまま町をねり歩いて終わるのか
シケモクの本一本すらも落ちていやせぬ
落ちていてもどうせ水たまりの中だ
やさしい小雨がおれをのろっている

かくなる上はおれは
このオーバーオールを捨てて作業着を
それも4割引きのを買って
パン工場へ働きに行くしかない

日がな一日 パンをこねて
そしてどさくさにまぎれて
おれのしょっぱい絶望の涙をまぜて
パンをこねあげるのだ

ふりだし

とどのつまり
おまえがそのように走り続けていたのは
この場所から離れるためだったのであって
しかしどうだ
そうやって走って走って走り続けて
結局たどりついたのは
どうしたことだ、この場所じゃアないか！

いくら距離の上で離れてみたところで
心がそのまんまなら
しゃアないんだよ

詩私論（私詩論）

詩にならぬことばなぞ無い

というよりそもそも
ことばそれ自体が
もう十二分に詩たりえているのだ

というよりそもそも
われわれがことばの存在を感じたとき
その瞬間を「詩」と呼んでいるのだよ

なァ、兄ちゃんよ。

まんが家の死

ひとりのまんが家が死んだ朝
僕はサウナに居た
駅まで歩いていった
ぼろずぼんをはいて 駅まで

家についたころには
もう朝刊を読む時間でなかったの
僕はそいつをうっちゃって
求人雑誌をめくった

職安に行く道すがら
すれちがったカップルが話していた
「××が死んだってさ
おフロで手首切ってね」

僕は嘘だろうと思った

家へ帰ってテレビをつけると
葬式の様子が映っていた
あわててうっちゃっておいた朝刊を開くと
笑顔のその人の写真が載っていた

僕はお茶をいれて一息もせぬまま
部屋のまん中に座りこんでいた

生活

へちま水つけて 女房が言った
「少しキレイになったでしょ？」
聞こえないフリして ギターポロンポロン

キューリとトントン切っている
夕ぐれ時の台所
お空にひこうき、夕ぐれ空に
長い長いヒコーキ雲

洗たくものヒラヒラ舞っている
日曜日のからっ風
かざみどり、忙しそうに
まち行く人にごあいさつき

みそ汁が出来上がるまで
ぼくは ギターポロンポロン

明日は午後から雨らしい
テレビでお姉さんが言ってたよ

明日は雨かァと女房が
かったるそうにため息一ツ

しぶ茶を飲んで 女房が言った
「ねえ、明日仕事休んでお家にいなさいよ」
ぼくはヤッパリ ギターポロンポロン

銭もないのに

今朝もまたヒゲをそり忘れたので
あらゆるハグルマがうまく回らない
ゼンマイ仕掛けの
イナバ物置で
次のしごとを探してすごす

今日もまた一日中
銭がなくて
たぶん明日もまた
銭がなくて

植木鉢に植えた（飢えた）
三匹の金魚は水がない為か
死んでしまってよ だから
墓石を探しに河原へ行こう
墓石にする石を
拾いに河原へ

今日もまた一日中
銭がなくて
たぶん明日もまた
銭がなくて

・・・だのにサイフだけは
あるんだよな
銭もないのにサイフだけは
あるんだよな

オレンジ色

きみのかみの毛が
とりあえず肩へと伸びている
風が吹いて来る方向（芳香）へ
小さな石ころを投げてみる

ゆれながら通り過ぎてゆく
子どもたちを積んだ列車がゆく
オレンジ色の空まで
オレンジ色の空につき刺さろうとして

きみの産んだ風が
ぼくをこえて 空を飛んで
ぼろいアパートのベランダで
洗たくものを少しゆらした

きみのかげぼうしが
とりあえず地面に伸びている
やがて宵やみにとけこんで
きみはかげにのっとられる

ゆれながら走り去ってゆく
子どもたちを乗せて飛行船がゆく
オレンジ色の空から
オレンジ色の空から落ちてゆく

きみの産んだ風が
吹き抜けて ふきぬけて
オレンジ色の空の下で
ぼくはふと それに気付いた

まいご

きみは大きな目を
もっと大きく開いて
街が燃えているのを観てる
けれど心配いらないよ
あれはただの家の灯火だよ

今夜は少し星が多くて
でもぜんぜん
落っこちて来やしない
きみはぼろぼろ泣いている
家がどこだか忘れちゃったと

だからぼくら
オデン屋のうらに腰かけて
きみの家の場所
思い出そうとしてる
きみは大きな目を
もっと大きく開いて
泣くのをがまんしている

出来ることならきみの脳髓になって
家の場所を思い出してあげたい
出来ることならきみの脳髓になってね・・・

そうしていると
ホラ、寒いだろ、って
オデン屋のおやじさんが
ゆでたまご二つくれた

見たな

コンビニで内気そうなお姉さんが
少しはずかしそうに
アイスクリームをカゴいっぱい
買っていた

ちなみに銘柄はすべて
ハーゲンダッツでした

寝転んでテレビ見ていたら
部屋のすみっこを走ってた
ねずみと目が合って
目が合ってしまった

向うもちょっとばかし
気まずそうでした

橋の真ん中でランカンにひじついて
川を見ていたら
僕が娘と手を取り合って
流れてゆくのが見えました

見なかったことにしました

あの娘の石

頭痛薬を飲んで
今日もおしごと
穴をほってクギを打って
ペンキをぬって

ずっとお金をせびってたあの娘は
この前肺炎で死んじゃったのさ

あの娘の石の前に
石の前に置く花を
買うために
今日もおしごと

おかめそば

なべやきなべやきなべやきなべやき
なべやきなべやきなべやき地獄

なべやきなべやきなべやきなべやき
なべやきなべやきなべやき昇天

なべやきなべやきなべやきなべやき
なべやきなべやきなべやき浄土

なべやきなべやきなべやきなべやき
なべやきなべやきなべやきよ飛べ！

星月夜

青の時代に生きるきみは
とても寒そうだ
休みの日の遊園地で
たれを待ってるの？

うごかない回転木馬に
うつろな目で座り
一番星の光が
血みたいな色して

七年前うめたきみを
ほりおこしに来たよ
丁度こんな夜だったよ
きれいな星月夜

ジェットコースターのレールを
登りつめて行く
さびついたボルトが
少しずつズレてく

こんなにいっぱい星
こわれたぼくにふりそそぐ
これからいつまでも
休みの日なんだよ

七年前うめたきみを
ほりおこしに来たよ
あの日の星月夜は
それはきれいだった

夢遊

タコの足を
いっぽんずつ切っていく
柱時計が
ぼーん、ぼーんと言うのにあわせて
一本ずつ切っていく
よく切れるほうちょう
すべるまな板
ぼくはねむれない目を開いて
地道に仕事をすすめてゆく
いっぽんずつ、いっぽんずつ
なにもしゃべらず切っていく
まわる地球の上でひとり
だまりこくった月の下で

タコは何も言わない
ほうちょうもぼくもそこに無いふり
そんな腹立たしい態度に
ぼくはそとときみの姿を重ねてみたりする

やがて8本あったのが
7本、6本、5本となってゆき
とうとう最後のいっぽんに
夜も更けた頃手をそえる
ぼくはねむれない
首だけになったタコが
ころりとまな板の上をすべった
ぼくはしゃべらない
うすぐらい台所で

月夜の病院

もうずいぶんと長い間

ぼくはこの白いかべの部屋にとじこめられて 赤い服着せられて

まずいゴハン食べさせられてるけど

夜になるとピンクの象や

200メートルのムカデや何かがやって来て

いっしょに笑い転げたり

いっしょにとびはねたり

いっしょに泣きわめいてくれるから

ちっともさびしくないよ

今夜もお月様あんなに大きく口を開いて笑ってる

きみへの旅

ねむたくて遊べない日曜日の僕は
何故かしら君のモノマネばかりしてる
こんな日だった 三歳のぼくは
あれほど大切なおもちゃをなくした

そんな風に今日が行き昨日はもどらない
明日なんてどこ吹く風で地球は回る
泣き方も怒り方も思い出せないから
マヌケな笑顔のまま歩きつづけてる

君が生まれてちょうど一年の今日は
夏みたいな気がした夏休みの夕ぐれ
こんな日だった 幼稚園児のぼくは
あれほど大切なおもちゃをこわした

そんな風にぼくは生き少しずつ終わって
いたずらっ子の神サマが日めくりめくる
誰の名も誰の声も忘れちゃったから
君の名と君の声だけ探しつづけてる

こんな日だった いつかのぼくは
あれほど大切な毎日を生きてた

そんな風にぼくは生き少しずつ終わって
明日なんてどこ吹く風のいたずらな神サマ
泣き方も怒り方も思い出せないままに
マヌケな笑顔のまま君を探しつづけてる

ちぎれ雲が流れる世界

とりあえずふみ出したあの日の一步が
こんな石ころだらけの道となり
そしてこれからどこへつながってゆくのか
ちぎれ雲が流れる世界で

生まれる前から探していた
あなたにはまだ会えていない
今日のぼくを明日のぼくが
投げる あの地平線へと

とりあえずここにいるぼく ささやかな命の足あと
とりあえず今日を生きるぼく それだけが幸せ

歌うことそれをしたいんだ
考えることそれがやりたいんだ
けれど心が干上がっちゃって
言葉のかけらも生まれてこない
けれどぼくの声はか細く
だれの耳へも届かない

いつかぼくがぼくでなくなる時に
いつかぼくがぼくだったことを思い出して
いつかあなたのために歌えたことを
それだけを この胸の中に

とりあえずここにいるぼく ささやかな命の足あと
とりあえず今日を生きるぼく それだけが幸せ

くだけちったぼくらのカケラ拾い集め
いつまでも消えぬ歌をうたおう

あなたが抱きしめていたのは ほんとうの空じゃなかった
ぼくが抱きしめていたのは あなたが生んだ雲だった

このうたは短すぎる

このうたは短すぎる
これじゃア何も歌えやしない
国民として落ち度無く節度ない
ばかなサビしか歌えない

この詩は短すぎる
自分のことすら語りつくせず
ましてやあなたの分までなぞ
どンドン体はくさってゆくのに

この一日は短すぎる
まだまだ昨日かと思っていて
そして気づいたらもう明日になってて
さア 今日をどこへさがすんだ？

この人生は短すぎる
歩き出そうとしてぶつかった
この岩をどけようとしている内に
幕は下りてでも誰の拍手も無い

このうたは短すぎる
このうたは圧倒的に足りない
このうたは圧倒的に足りないんだ
生きてゆく上でも死んでゆく下でも

夜にげ

今を捨てて約束された場所へ

そこにあるのはただ空気で
別だん あなたとわたしの間に
違いがあるわけではない
風には何の色もない

今を捨てて約束された場所へ

雑穀の入ったずた袋
それを背負って丘を登ってゆく
いくつ背負うのかももう決まっているのか
何往復するのもう決まっているのか

今を捨てて約束された場所へ

過去にしがみつくのは論外で
今にしがみつくのが執着で
未来はしがみつき所がないならば
大量のイカのくん製とワンカップ大関を買って

今を捨てて約束された場所で
大いに飲もうではないか

途中下車

寒い 寒い

実際問題寒い

停まりっぱなしの電車で

きみの街へと

茄子の古漬けの似合う（におう）

さびれた住宅街の横

電車は停まる小さくなって

なんだか気まずそうに

暗い青春

実際問題暗かった

何故暗かったかと言えばそれは

ぼくの性格が悪かったからだ

ベルが鳴る

降りないよ 電車は動き出す

逢えないで

よかった

ゼラチンのかけ

アスファルトの上を
くるまが走ってゆく
ゼラチンのビルのかげに
見えたのは昨日なのか今日なのか

小さな赤い靴をはいて
女の子が横切ってゆく
ぼくの知らない女の子が
ぼくの知らない歌を歌いながら

ぼくは今日はお休み
なんにもしてやしないんだ

公園のすみに腰かけて
ぼくのいる場所を思い出そうとしている
ぼくのくわえたたばこが
みじかくなって行ってそして夕ぐれが来る

ぼくは今日はお休み
なんにもしてやしないんだ
なんにも

レールの向うの町

わたしは空に
なにか投げようと
のび上がってほほに
風がそよぐのを感じる

こんな遠く
こんな遠くでわたしは
だれもが居てだれも居ない
雑踏でおち葉の上をゆく

ゆめ見ている
きみのもらした言葉は
昨日ついたうそほど
つつましくくれなずむ

これからどこへ行っても
なにをしてもわたしは
いつかきつとここへ
帰ってくるのだろう

わたしはきつとここへ
帰ってくるのだろう

第 II 部

革命の夜

革命の夜

クワを持った人々が
がれきのそばで息をひそめる
星がきれいで
悲しさでいっぱい
震える心をおし殺して
ずぼんについたどろをはたく

かたくてふしだらけの手で
涙をぬぐったその手で
今夜彼らは生まれかわる
今夜彼らは生まれかわる

バーベキュー

ぼくはひとりでバーベキュー 人里離れた山の中
自分でさばいた畜肉を ナツパといっしょに燃やしてる
天まで届けと火を燃やす 破裂してゆくガスボンベ
アル中の体に酒を注ぎ 死ぬまでケモノの肉を焼く

きらわれ者のこのぼくは 風の吹きすさぶ谷の下
この世のすべてを焼き尽くし 青空までをもこがしたい
ぬめりのとれない肉包丁 夕陽にかざして泣き笑い
たったひとりのバーベキュー 生焼けの肉をほおぼって

かなしおそろしバーベキュー 死ぬほど楽しいバーベキュー
かなしおそろしバーベキュー 死んでもやりたいバーベキュー

山を燃やして肉を焼く 呪いの叫びを上げながら
この世のすべてが炭化して 焼きあがるのを夢見てる
ぼくはひとりでバーベキュー 人里離れた山の中
天まで届けと火を燃やす 死ぬまでケモノの肉を焼く

かなしおそろしバーベキュー だれかを燃やしてバーベキュー
かなしおそろしバーベキュー 葬式がわりにバーベキュー

ティータイム・ブルース

パラソルチョコを買って来よう
それをさして遊歩道を歩こう
お菓子の家は買えないから
家の中をお菓子でいっぱいにして

歌うたいながら砂糖をまぶそう
降りしきる砂糖の中をスキップしよう
いつしかそれは雪に変わって
気づいたときにはもうすぐクリスマス！

ウイスキーボンボンでカンパイしよう
酔いしれたままで風に吹かれよう
酒ビンなんて残りやしなさいさ
ただ銀紙だけが床一面に散らばって・・・

一月に光ってるよ！

哀しい温度のお茶を飲もう
食べ散らかしたお菓子をまえに
覚めた夢のかげをひこじって
からっぽのコーヒー茶碗の中へ
ため息ひとつ

すべてが空っぽの 昼の三時にサ

失業中です

米代やガス代を払わないと人として生きてゆけないので

ぼくは仕事にせいを出す

・ ・ ・ ために仕事を探している

行き場（生き場）のない人生バツカリ町のすみへ吹きだまって

ごろごろ転がって行って

あくびが一つ出た

弁当の中身はショーユごはん

これで今日一日はやってゆける

就職のためだとかき集めた金持って

また酒屋へと

粉っぽい甘口カレーのにおいが風に乗ってやってくる

ここがガマンのしどころさと

ショーユごはんをほおぼって

でも酒は しどころじゃない

ガマンのしどころじゃないと

酒は力のぬきどころさ

ぬきどころさとやっぱり酒屋へと

そんなわけで人なみに

宿酔といっしょに朝日を見る

今日こそは仕事にありつけるかな

自分の金で一杯やれるかな

詩

空が青くて
風はない
なにも動かない
なにもない時間

そこでふと
上を向いても
ただいっぱい
青空

瓦が輝いて
雲はない
なにも聞こえない
なにもないあぜ道

そこでふと
しゃがみこんでも
ただかかえ切れない
青空

空が青くて
風はない
なにも動かない
なにもない大地

そこでふと
ぼくが立ってても
ただいっぱい
青空

フルーツバスケット

きみが出ていったあとで
きみが閉めたドアの音がして
それでおしまい
残らず持ってった
きみのものに関しては
花びんから何から
マグカップまで
そしてぼくはソファの上
キッチンにはフルーツがある
しかしそれを食べに行こうとはしない
テレビもつけず 口笛も吹かず
さしあたってはソファの上
そしてこの風景に一等似合うのは
ペンペン草だななんて考えている

きみのネジのぬけたあたまは
憎しみの方へしか走れなかった
でもそういうことってよくある
手さぐりで野原のまん中
逃げた野うさぎを追う秋の夜長
そういうことってよくある

さてきみはどこへ行くのか
きみのまわりのものは常に遅すぎるのさ
そしてきみは傷つきやすいんじゃなくてわがままなんだ
ただそれだけのことだけど それをわかろうとはしないんだ

馬鹿話をして食卓
踊りまくってぬけた床
そんなものを眺めて
ぼくはとりあえずソファの上
もうごめんだよ
すきま風で世界がいっぱいになっちまった
もうすべてがごめんだよ

フーセンガム・ブルース

カゼひきの薬をのんでいる
フーセンガムをかみながら
ありったけの力をこめて
大きく大きく ふくらましたくて

ぼんやりとした頭の中で
きみのうたが響いてゆくよ
開いたカサをくるくる回して
石畳の上でトンボ返り

とぎれた雲のすき間めざして
ぼくは空へと昇ってゆく
ふくらましたフーセンガムに
ひっぱられてプカプカたよう

フーセンガムの見せる（魅せる）夢は
昨日の空から犬がくわえてきたもの

ひるねの神様がおりに来る
天使を大勢ひきつれて
そんなわけで誰もが夢を
夢を見ている木漏れ日の午後

カゼひきのぼくも木漏れ日の中
この葉のカゲとゆれながら
少しずつ少しずつ浮かんでく
そんなけだるい昼下がり

フーセンガムが呉れた（暮れた）夢は
明日の空へとぼくがくわえてゆこう

死んだ人

はな水垂れて枯れすすき
行く人もなき秋の道
泪といっしょにブラつかせ
我は生きんとすすり上ぐ

はな水垂れて落葉散る
泳ぐ金魚に促され
空にちらばるウロコを拾い
我は生きんとすすり上ぐ

はな水垂れて赤トンボ
軒のくもの巣に貼りついて
見上げた空はこげちゃ色
我は生きんとすすり上ぐ

はな水垂れて日ぐれ時
風の刹那に溶け込みて
再び吹いた風に散る
我は生きんとすすり上ぐ

はな水垂れて神無月
我は生きんとすすり上ぐ

神かくしの夏

不思議とだまったままの
自動販売機でジュースを買って
空に夏がうつった
それを見ながら飲んだ

子どもたちの笑い声がする
でも声がするだけで誰もいないよ
みんな連れて行かれた
みんな連れて行かれちゃったから

終わりのあとで何をうたえばいいのか
何もしないまま空に浮かんでる
終わったあとでまた何かはじまるのかな
ぼくのそばには誰もいない

公民館でお芝居をしている
旅回りの役者たちがつかれた顔で
音のないお芝居
セリフひとつないお芝居

かげのない子供たちが帰ってゆく
帰る家もないっていうのに
そして夏が終わった
夏はとおりにすぎて消えた

終わりのあとで誰にうたえばいいのか
何もしないまま日が暮れてく
終わったあとはもうずっと終わったままでいるのかな
ぼくのそばには誰もいない

ガムをかむ

電線をブツ切って

ガムをかむ

町はマックラさ

ほくそ笑む

クーラーの効かなくなった電車が座りこんで

少し時間が停まったみたい

どの色もない信号の下で

ガムをかむ

静けさの中でへんな唄を

口ずさむ

帰り道で戸惑っている若者たちの間をストップ

少し時間が止まったみたい

少し時間が停まったみたいな

停電の夜

ポケットの中のニッパを握って

おれはニヤニヤ

もう味のなくなったガム

足元へ捨てた

ニジマス釣り

マーケットで
さお竹を買ってきて
洗濯物を干そうと
思うんだ

ひもじさは
時には
悲しさのフリをして
5時の時報を鳴らす

夜のふりをして
昼下がりに眠る
そのたわいない嘘に
ひとりであうけている

はためくぼくのずぼんの下
人々が行き交う
知らない間にここも
都会になるのかなァ

ぼくは夢をみる
夢のなかでぼくは
冬の船の上で
ニジマスを釣り上げている

ずぼん

「ずぼん」というのはまぬけな響きだ
まるでずた袋の底がぬけたみたいだ
「ずぼん」という言葉それ自体のみならず
「ずぼん」という言葉それを使う人も
「ずぼん」という言葉それ自体と同様に
ダサイと見なされる
だってそうじゃないですか
「ずぼん」ですよ？
まるでマンホールに落っこちた
コニシキみたいな響きじゃありませんか！

それじゃア兄ちゃんよ
あんたがはいてるそれは何だ？

イクラ洗いざらしでも
無頼漢っぽく穴があいてても
体にびたあっと密着していても
「ジス・イズ・ア・ペア・オブ・ブルー・ジーンズ」つつっても
やっぱりそれは
根本的に
ずぼんだ
本質的にずぼんだずぼんだ

ぼくは胸をはって
「ずぼん」と発音しよう
まぬけな感じで
空気がゆれる
かまうもんか
まったくもってかまうもんか
要はぼくがここにいるってこと
ぼくがここにいるってこと

花見

ウイナコーヒーを注文する
運ばれてくるまでの時間
これを有効に活用せんと
窓の外を見る
風景を見るのです
すると
花が散っているじゃアないか
花びらが舞っているじゃアないか
その花びら一まい一まいに反射した太陽が集まって
ウス暗いコーヒーミルを照らしている

運ばれてきたウイナコーヒーを飲みながら
ぼくは少しく不健康な顔している

きみはまだ帰ろうとしない

セミのカラを拾い集めて
秋を作ろう

こんなにも早く
日は沈もうとしていて
稲穂にうもれた案山子の
影が長くながく伸びて

だからもう
帰ろう

実ったシブガキを
軒先につるして
山から吹く風に
カキノミは小さくゆれて

だからもう
帰ろう

つるべ落としの日は
山の端に引っかかっているそのとき
ふとふり返ったあぜ道の上に
子どものころのぼくがぼつねんと立っていて

だからもう
帰ろう

だからもう
帰ろう

たいくつ

うわの空に
浮かんで
大あくびを
ーツ

ぼっかりと
きみのあくびが
空に
穴をあけて

そんなわけで
今夜は美事な
満月なんです

そんなわけでここにいる

牛乳を日がな一日中
大きなオタマでかき回して
きみのねこは大好きな
バターを作ろうとしてる

ひっくり返したオモチャ箱のへりへ
線路が長く伸びてゆく
いつになったら電車は来るのかなァ
いつになっても来やしないのかなァ

きみは洗面器に水をはって
今日もずっと顔を洗ってる
きみがお早うを言う頃には
町みんなは「こんばんは」って言うヨ

もうすぐ冬がくるとかで
きみのかえるは穴をほってる
冬はもうそこまで来てるので
庭中のアリが働きづめさ

きみは洗面器の中に映った
じぶんのぶさいくな顔を見ている
居場所も行き場もありやしないから
そんなわけでずっとここにいるヨ

そんなわけでずっとここにいるヨ

春さん

ごぶさたしてます ところで
わが家にもついでこの間春が来ました
オオイヌノフグリをいっぱいつめた
ぼろいかばんを提げて
冬のカケラをあちこちへつけて
いやァまだ冷えますねと
言いながら

女房が入れた番茶を
実にうまそうな顔で飲んで
ぐるりと汚い六畳半を見回して
いいとこですななんてなれないおせじを
言ったりするもんだから
お茶がヘンなとこへ入って咳きこんだり

そして春はわが家の庭に
チューリップを植えてゆきました
これはいい色のが咲きますよって
そんなわけで少しばかり
あったかい今日この頃です

地平線

石で魚を彫る
それが当面の仕事
石の魚を食べる
それが最近の生活

銭形は
ルパン三世を捕まえないまま
死んでしまうのだろうか
トムは
ジェリーを食べられないまま
死んでしまうのだろうか
幼稚園の帰りみちで拾った
トンボの七色メガネをかざして見た空は
やはり
どこまでも青一色だったのだろうか

どこでもドアを使えば
地平線まですぐのはずです

坂の町

ゆるやかな坂の町
宵やみに灯がともる
一年前もこんなふうで
たぶん一年後もこんなふうだろう

私は
自転車を押して
歩いてゆく
この町を通りすぎてゆく
自転車のカゴに
コインランドリーで洗った一週間分の服を
詰めこんで
詰め込んで

どこからかシチューのにおい
いつの間にかまた冬かと
わたしはサドルにいたむ腰をもたせかけ
木が枯れてゆく音を聞く

この家々に住んでいる人たちを
わたしは知らない
いつか出会えるかもしれないし
そうはならないままお互い死んでゆくかもしれない
とりあえずわたしはわけもなく
その人たちの生活に
あこがれてみたりする
そんなかんじ

ゆるやかな坂の町
宵やみに灯がともる
一年前もこんなふうで
たぶん一年後もこんなふうだろう
わたしの洗濯物は
しんと冷え切っている

梅雨

ぼくのさびしさが
きみのあたまとあくしゅして
だから今日もホラこんなに
雨バツカリだよ

流れてゆく

流れてゆく
ぼくらの手足の先から
流れてゆく
風に溶けてゆく
上も下も右も左も
かき消すようになくなって
流れてゆく
ぼくらの強がりといきかりが
流れてゆく
太陽が昇ってゆく
昨日も今日もそして明日も
明後日までも、どんぶらこと

さびしがり屋も
ウソツキも
ワガママも
自己愛も自己嫌悪も
何か欠けたまんま
生きている人たちも

流れてゆく
ぼくらはちっぽけなつぼみで
流れてゆく
地球が回ってく
ぼくもきみもかれもかの女も
過去も未来も現在も
一次元も二次元も三次元も
憎むことも忌むことも
傷つけることも傷つけられることも
他人を、自分を、だますことも
なんにもなくなっちまうことも
花鳥風月に抱かれて
どんぶらっこつと

あの日のうた

おれの哀しみがとけてゆく
哀しいまでにあおい空
おれの火照ったほほに吹く
山の向こうからの風

おれが寝転んだ野原は
見渡す限り枯れ草で
冬枯れ色した顔つきでいて
でもまた青々と茂るのだろう

ちっぽけなおれのちっぽけなフトコロの中
ちっぽけな失望の火種が燻る
燃え上がりも消えもしないままで
とめどもない涙に咳こんだ
けれどもこんなに巨きな野原の真ん中でそれは
こんなに巨きな空の下のゴミみたいな火種で

ずぼんに付いた草のキレハシを払って
ぼろぐつのおれは立ち上がる
それにしても哀しいまでに
あおくて巨きな空があった

洗濯指数

肉屋とクリーニング屋と薬局があって
その向かいに赤いポストがあって
そのポストの横のマンホールの下にある
下水道の中で今日七時に会いましょう

宇野バスの二本松東の停留所で降りて
そのすぐ近くのツタヤの前にある
マルナカの駐車場にある PM 8 : 0 0 に閉まるマクドで
マックグラン4, 5個を買って行きます

今日は降水確率60%ですが
なぜか洗濯指数は80%です

父さんのイビキ

父さんのイビキが
空気をゆらしている
ぼくのべんきょう机のすみに置いてある
一円玉を貯めておいたガラス瓶をもふるわせている
まァ それはうそだけど
そんな風な感じで聞こえてくる

ぼくも時たまイビキをかく
自分のイビキで目覚めることもある
でもそんな時は
スッキリパッチリ目が覚めるわけじゃなくて
眠れる森の中へ
左半身をそっくり忘れてきてしまったような
そんな宙ぶらりんの気分がフトンにくるまっている
そしてどこからか
どこからかは判ってるけど
イビキが聞こえてくる

父さんのイビキが
空へたちのぼってゆく
世界の中心で
大の字になってイビキをかいている
父さんのイビキが
宇宙の真ん中からひびいて来る
もう30年もしたら
ぼくもあんな感じでヒックリかえって
イビキをかくのだろうナ

メダマヤキ・ブルース

メダマヤキを焼いている
ぬけたカラスが夕日とまちがえて
楽しそうに哀しみに鳴く
七つの子もいやしないのに

メダマヤキを焼いている
ベル鳴らしながら自転車が通る
5段変速の「5」にしても
のんびりとしか走れなくて

いつからかどこからか
ぼくは何をしているのか
白身がパチパチ音を立てて
ぼくのうらみつらみが夕日に溶ける

メダマヤキを焼いている
トーフ屋のラッパ聞きつけて
サンダルっかけて駆け出す
そんないつもの調子です

フーテン

ふと風の通りみちを感じた
住宅街だった
白いペンキで「止マレ」と書かれた
その上へしばし立ってみて

つまらない交通安全の標語と
さびついたブランコのきしむ音が
水をまいた夕ぐれの芝生を
またいで行ったのだった

ぼさぼさの頭で
ぼろぼろのずぼんで
ずぼんのほこりをはたいて
ぼくどこに居るのかな思うて

家々のなかで迷子のままで
色あせたキズナがこわれてゆく
ぼくのぼろぐつの底のように
すりへってゆくこの幸せな町です

よれよれのシャツで
よろよろと歩いて
ぼくも新しいダンボールを拾って
ずぼんにつぎを当てようか思うて

ずぼんのほこりをはたいて
ぼくどこに居るのかな思うて

青年は高野豆腐

たらちねのははのくねりにこぼれおつけろげろばっばのあみだによらいは

深く深く頭を垂れて
おまえの顔を探してじゃり道を
歩く 猿回しをしながら
おまえをじゃりの中に探して

あしひきのやまにやむれずむらむらとぼろがばらけてみじんぎりかな

よどんだ川をうめつくしている
娘の結った桃割れの頭
びんのほつれがウナギとともに
海へ 海へと道をいそぐ

あまかざるひなへなへなのもへじかないずこもちゃらんぼらんのあばば

お前の顔を炊飯器の中へ
炊飯器の中へ見つけて
フタしめる 秋の夕ぐれ
フルサトは遠い

ラララ・・・

ありがとう

ありがとう

首の長いきりんも

鼻の長いぞうも

首も鼻も長くないきみも

ありがとう これからもずっと

ビスケットを買って公園へ行こう

木につながれたサルが待っている

ぼくが腰かけたベンチは

いつの間にかぶらんこになっていて

一ゆれているのかもしれない

ありがとう

今日もまた

いい一日だった

化石探訪

ひとりでのび上がったり立ち上がったたり座りこんだり
地球の回るリズムに合わせて手拍子うったり
そんな風にしながら砂の中かき回して
きみの化石を拾い出そうと進んでゆくのか

ふたコブラクダのコブとコブの間で
見渡す限りの砂漠を見渡して
こんなにも丸い地球の上だから
どこまで行けどもキリがなくて

二億年前のきみを見つけるために歩いている
もうとうに西も東もわからなくなったまま
歩いている

腹をすかせたラクダをなだめすかしては
自由帳を開いて自由奔放に日記をつけてる
全部わかったところでなにも変わりやしないよ
やたら夏だらけさ でも生きている 生きることが生きる意味

からの水筒のなかで浅いねむりの中で
夢の中に出て来たきみの笑い声
ずっと聞こえてる 頭の内側で
目が覚めても覚めなくてもそんなに変わりやしないさ

二億年前のきみを探して化石探訪
生まれる前から死んだ後までずっとそのまま
歩いている
何も見つかりやしないだろうけど
歩いている

e n t o t h u

冬のエントツが
空にのびている

くもりガラスが
空にサヨナラする

メダマヤキ歩いてると
油のハネる音がマフラー巻いて
表へ飛び出してそのまま
電車へ乗ってどこかへ行っちゃった

雪の歩道橋が
空をささえてる

ぼくのマグカップが
タメイキもらす

ホコリまい上がってる部屋
枯れたセーターがささやく
今日も寒いですネってさ
ストーブがひくく返事していた

冬のエントツが
空へのびてゆく

ぼくのホオヅエが
地球とつながる

五十億のあなたへ

立ちつくしたこの地面
は
どこかへつづいているような気がしてならない
この町をこえて 山をこえて 海をこえて
地図の上の道という道を
たどって行って
地図の上に無い道という道を
這って行ってその先は
どこかの病院の一室
ひとりの少女が涙をこぼしている
大好きなピアノもひけないまま
窓だけがかの女の世界となっている

このぼくの立ちつくした地面
が
どこへつづいているかは知らない
さびしさのたいまつをかかげた
何かを忘れた人たちのいる場所に
つづいているのか
ぼくもまた彼らの一員で
ぼくの手にもやはりたいまつが一本
だから
彼らを救うなんて大それたことは出来無い
けれどいっしょに 忘れて来たなにかを
思い出そうとすることは
出来るんじゃないかと思う
そうすれば ほんの少しだけ
たいまつがあたたかくなるかもしれない

そうすれば ほんの少しだけ
少女のねむりが やすらかになるかもしれない

きみは空に抱かれている

生まれたばかりの君の手をとって
くれてゆくまちを見ていた
夏の終わり きみはまだ
秋も冬もそして春も知らない

くれてゆくまちに灯がともり
きみは覚えたばかりのコトバをつぶやく
ふみしめている 大地の上
きみは空に抱かれている

ぼくはその小さな手を
なにかをつかもうとしている手を
にぎり返す
鼓動が聞こえる
喜びが聞こえる
きみは生きている
風に吹かれ
声を上げて
ぼっかり浮かんだ月を見上げる

そのすべてを
しっかりと抱きとめて

生まれたばかりの君の手をとって
くれてゆくまちを見ていた
夏の終わり きみにはこれから
秋も冬もそして春もやって来るんだ

こぶ茶の日

今日生まれて初めてこぶ茶をのんだ
夕ぐれのさびしさにうながされて
それはそれはおいしゅうございました
フーフー冷ましながら

こぶ茶を飲みながら外を見やると
寒そうに空が暮れてゆく
相変わらずぼくは寒がりです
ヒューヒュー風吹いて

今日生まれて初めてこぶ茶をのんだ
何もない休みの日の夕ぐれです
相変わらずぼくはさびしがりです
フーフー冷ましながら

フーフー冷ましながら・・・

後記

この詩集に収められている67篇の詩は2004年5月から同年9月28日までに書かれたものである。第Ⅰ部と第Ⅱ部の二章から構成されているが、実は第Ⅱ部脱稿後に間髪をいれず起稿され、11月12日に脱稿された第Ⅲ部が存在している。しかしこの第Ⅲ部は今までとは毛色の変った内容・作風になっているので、編集しなおして「十六歳詩集」というタイトルをつけ、別の作品集とした。

どれこれれもなんとも古臭く、情けない詞である。

※

世の中には大きく分けて二つの種類の人間がいる。器用に生きられる人間と、不器用にしか生きられない人間とだ。或いは、かっこよさに疑いを持たずに生きられる人間と、かっこよさを疑わずにはおれない人間とだ。僕は残念ながら、どちらとも後者の人間に属する。そして、後者に属する人間が如何に生きるべきか、それを考え続けている。

ひとつの答えが、文学だった。わが敬愛する坂口安吾は、「エンタメと文学は区別されねばならない」と言った。「無論、エンタメを蔑んでいるわけでもなく、文学を高尚なものと考えているわけでもない。格付けせよと言っているのではない」その通りである。そして安吾はこう結論する。「エンタメは健康な人のためのオモチャであり、文学は不健康な人のためのオモチャである」・・・と。

この「不健康」という表現、最近では「ビョーキ」という風に表記されたりもする。それは、不器用にしか生きられない気質であったり、かっこよさを疑わずにはおれぬ性格であったりする。その点において僕は「不健康」なのだろう。

無論、不健康だから迫害も受ける。時代に折り合いが付かないまま生きていくのは容易なことではない。特に、流行ファシスト（註）だらけのこの世の中においては。

もし不健康な人間ばかりが世の中にいっぱいになったら、それは大問題である。社会が動かなくなる。しかし、かといって、健康な人間ばかりいっぱいになれば世の中よくなるのであろうか？そんなわけではないとおもう。そんな健康な社会になれば、どこかでより大きな残忍で、陰湿な爆発がおこることであろう・・・しかも、隠された状態で。

だから塩として、胡椒として、口に苦い薬として、不健康さは絶対に欠かせないものであると思う。

だから僕は不器用に生きようと思う。かっこよさを疑い続けようと思う。

そんな不器用でかっこ悪いデキソコナイが心象風景を書き記したもの、それがこの詩集です。「ここ」はいつだって遠くにありました。いつか「ここ」にシッカリ根を張って、空を仰ぎ見られますように。

註；流行ファシスト・・・僕の造語である。ただひたすらに流行を追い、「最近のもの」か「古いもの」という価値基準しかなく、自分が他人と違う生き方をするのを極度に恐れ、また自分と違う生き方をしているものを嫌悪しぬき、排斥せんとする、可哀想な人々。しかし、この人たちがいろんなしょうむないものを大量に購買してくれるので、経済が成り立っているという面もあり、商売人にとってはお得意様だ。企業は競ってこの流行ファシストたちに金を払わすべくキャンペーンを展開し、時代の空気を捏造し、膨大な商品売りつける。流行ファシストたちは半ば強迫観念とも言える思いに駆り立てられてそれらを購入し、あたかも自分たちが最先端に行く素敵な人間であるかのように思い込んで安堵するのである。